様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０３２３
研究課題名（和文）　回游魚利用の歴史地理学的研究

研究課題名（英文）Historical and geographical studies on use of migratory fish

研究代表者
橋村　修（HASHIMURA OSAMU）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：00414037

研究成果の概要（和文）：
本研究では、歴史地理学方法と民俗学的方法を用いて、回游魚と人との関係の解明をおこなった。調査地は、日本列島、琉球諸島、台湾、フィリピン、ミクロネシアのパラオ、地中海のマルタである。回游魚と人との関わりについて、アジアの中での日本の位置づけをおこない、さらに、アジアとヨーロッパとの比較文化研究をおこなった。

研究成果の概要（英文）：
This research is focused on the relationship between migratory fish and humanity through the studies of historical, geographical and folklore.
Research target areas are Japanese Islands, Ryukyu Islands, Taiwan, the Philippines, Palau in Micronesia and Malta in the Mediterranean Sea.
As to the relation between the humanity and migratory fish, we tried to clarify the characteristic of Japan within Asia and also the comparative studies between Asia and Europe.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１２年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：歴史地理学
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：回游魚　歴史地理学　シイラ　日本列島　台湾　マルタ　浮魚礁　漁場　資源

１．研究開始当初の背景

海と人との関わり、魚と人との関わりについての研究は少ない。そうした学界の動向のなかで、回游魚と人との関わりの研究を進めることには意義があるものと思われる。

近世から現代までの漁業史研究では、漁獲物の流通や漁場地代論、捕鯨などの大規模漁業の経営史などといった漁業経済的な研究の蓄積がある。一方で、漁業技術、漁場利用、おかず漁業としての漁撈、魚の村落内での分配にあるような「生業」としての漁業史研究の蓄積は依然として少ないといえる。これは、

澁澤敬三氏が魚名の研究と漁業史、漁業民俗研究の融合を目指したテーゼを提示したにもかかわらず、漁業史と漁撈民俗研究が分離していたため、十分に行われてこなかった結果だといえる。それでも、近年では、網野善彦氏による海民史や社会史研究の影響を受けて、社会史と経済史を融合した漁業史研究が増え、高橋美貴氏らによる資源保全の議論も行われている。漁業史と民俗学・地理学を融合させる研究がおこなわれるべき時期に来ていたのである。

では、本研究課題である回游魚の漁業と利用の歴史地理学的研究についてみていこう。人は回游魚を、毎年来るのかどうかという疑問、すなわちリスクを意識しながら常に見つめている。日本列島周辺海域で獲れる魚の多くは回游魚である。暖流のカツオ、マグロ、寒流のニシン、タラなどが挙げられる。この研究では、これらの回游魚のうち、必ずしも経済的に優位でない魚のシイラ、トビウオ、サワラ、カジキ、イカなどを取り上げる。経済的価値の低い魚でも、決まった時季に来るからこそ貴重な現金収入源となる点、魚の移動と沖合、沿岸の漁場の関係性、魚を追う漁業者の移動性・定着性、それらの魚に対するタブーなどに注目する。そこからは、カツオ、マグロにない回游魚文化の特徴を見出せると考えている。

その回游魚の恵みに依存していた近世期の藩はニシンの松前藩もあったが、カツオやシイラなどの回遊魚の豊富な薩摩藩、土佐藩など西南の雄藩が多かった。この研究では、漁業史研究が遅れている薩摩藩に注目する。薩摩藩は南九州から琉球諸島までを実質的な支配域にしていたため、その藩内での回游魚と人との関わりは実に多様であった。当該地域の研究を進める上で重要な資料は、これまで研究代表者が用いてきた漁業絵図、漁場争論図などに加えて奄美市立博物館に最近寄託された童虎山房文庫（故・原口虎雄鹿児島大学名誉教授所蔵資料・史料）の水産関係文書群である。この文庫には薩摩藩、南西諸島地域を解明する上での膨大な基礎資料が揃っている。しかし、いまだ未整理であるため、整理を進める過程で、研究の進展が必ず期待できる。

さて、回游魚をめぐる歴史研究には、歴史史料に加えて聞き取り調査や魚の生態調査が必要である。しかし、この調査方法は、大きな壁に直面している。現在、歴史史料については、市町村合併に加えて漁業資料の残る漁協も合併が進み、資料の散逸が問題となるなかで、その発見と保存が求められている。この 10 年はそうした作業のできる最後の段階に入っているといえよう。また、古老たちへの聞き取り調査も高齢化が進むなかで、急務となっている。つまり、これからの約 10 年の間に大正時代の生れの方に話を聴くことも難しくなる可能性が高い。文字史料や絵画資料が残っていても、その内容を具体的に知るためには、少しでも昔のことを知る人から話しをうかがうことが重要である。

研究代表者は、近世の漁業史、漁業絵図に関する研究を蓄積し、研究方法のノウハウを見出してきた（橋村修『漁場利用の社会史』人文書院、2009 年）。その土台に立ち、歴史と民俗・地理の研究をつなぐ方法論を示し、実践するために、本研究を立ち上げることにした次第である。

２．研究の目的

本研究は、基礎研究と方法論の提示が求められている漁業史研究を深化させながら、歴史史料（絵画資料を含む）と聞き取り調査を組み合わせた方法論の確立をめざしておこなわれるものである。研究代表者は、日本列島、東アジア、東南アジアにおける漁撈活動、漁業経済に関する歴史地理、文化地理的研究を進めている。本研究は、(1)回游魚と人との関わりについて漁業絵図・史料と現地調査に基づく歴史地理学研究を南九州、南西諸島でおこなう、(2)回游魚利用をめぐる比較文化論（日本とアジア、アジアとヨーロッパ）、(3)漁業史研究における歴史資料とインタビュー記録との結合を目指した方法の確立を目指すことを目的としている。

３．研究の方法

歴史地理学と民族学・民俗学の方法を用いた。この研究は、基礎研究と方法論の提示が求められている漁業史研究を深化させながら、歴史史料（絵画資料を含む）と聞き取り調査を組み合わせた方法論の確立をめざしておこなわれた。研究代表者は、日本列島、東アジア、東南アジアにおける漁撈活動、漁業経済に関する歴史地理、文化人類学的研究を進めている。本研究は、(1)回游魚と人との関わりについて漁業絵図・史料と現地調査に基づく歴史地理学研究を南九州、南西諸島でおこなう、(2)回游魚利用をめぐる比較文化論（日本とアジア、アジアとヨーロッパ）、(3)漁業史研究における歴史資料とインタビュー記録との結合を目指した方法の確立を目指すことを目的にしておこなわれた。あわせて、東日本大震災にともなう被災地の漁業史調査もおこなった。

４．研究成果

各年度別に研究成果を説明していく。

22 年度の国内調査は、古文書資料調査を鹿児島県奄美市立博物館に寄託されている童虎山房文庫（原口虎雄鹿児島大学名誉教授の文庫）でおこない、水産関係資料の目録化を進めた。さらに国立民族学博物館において物質文化資料の調査をおこなった。現地調査は、千葉県房総半島、熊本県荒尾市、長崎県平戸市生月島、鹿児島県枕崎市、薩摩川内市甑島地方の回游魚利用と漁村構造の調査、福井県三方郡常神半島において正月の回游魚利用の儀礼の調査をおこなった。

22 年度の国外調査は、シイラ（鬼頭刀、飛虎魚）資源の漁獲生産高が世界で最も高い台湾において国立高雄海洋技術大学の協力を得て水産会社と台東県成功鎮、屏東県東港、宜蘭県南方澳の漁村の漁会を訪問し、カジキ（旗魚）、シイラ、トビウオなどの回游魚漁業・利用実態に関する調査をおこなった。さらに地中海のマルタを 2 週間にわたり訪問し、シイラ（ランプーキ）漁業と食文化とマグロ蓄養漁業の実態調査を臨海集落でおこなった。海洋研究所においてロベルト所長はじめ研究者と情報交換をおこない、マルタ大学図書館で当地のシイラ、マグロ漁業史に関する研究文献と博士論文の調査を実施することができた。学会報告は、地域漁業学会、早稲田文化人類学会でおこない、研究の経過報告については、各ジャーナルに投稿をおこなった。

23 年度の国内調査は、薩摩藩領の水産関係古文書調査を鹿児島県奄美市立博物館に寄託されている童虎山房文庫（原口虎雄鹿児島大学名誉教授の文庫）でおこない、さらに史料記述に係る現地調査を鹿児島県江口漁協ほかでおこなった。また漁師から過去 20 年分の市場への魚の販売伝票を預かり分析作業を進めている。東日本大震災被災地の漁業史調査も宮城県気仙沼市、千葉県旭市でおこなった。

23 年度の国外調査は、継続調査として、台湾において国立高雄海洋技術大学の協力を得て屏東県小琉球、基隆においてカジキ（旗魚）、シイラ、トビウオなどの回游魚漁業・利用実態調査を進めた。また昨年度に引き続き地中海のマルタで 1 週間にわたって民俗調査を実施し、シイラ（ランプーキ）漁業と食文化、マルタの漁船に関して情報を得ることができ、海洋研究所においてロベルト所長、マーク研究員らと継続的な情報交換をおこなった。さらに、パラオを初めて調査し、回游魚利用の実態や、沖縄からの漁業移住者へのインタビュー等をおこなった。

23 年度は、当初の目的に加えて、沿岸地域に大きな被害を与えた東日本大震災に対して歴史地理学、漁業史がどういう役割を果たせるかという課題にも向き合うことになった。

24 年度は研究の補充調査、研究内容の学会報告と報告書や雑誌類への投稿、掲載をおこなった。調査は、長崎県南松浦郡新上五島町の近世近代のマグロ定置網漁業、鹿児島県枕崎市南さつま市の近代漁業民俗、山口県長門市大浦・萩市のシイラ漬漁業、島根県津和野町・浜田市の回游魚漁業と魚の流通範囲、新潟県上越市糸魚川市柏崎市佐渡市のシイラ漬漁業と魚の食文化の歴史展開について実施した。学会報告は、日本生活学会において 6 月に「食の安全をつくる」というサブタイトルで回游魚利用をめぐる資源循環の民俗について報告した。

この 3 年間の研究成果を単行本としてまとめるための作業、地域振興に貢献するための作業をおこなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 18 件）

１．橋村修、「コスタリカにおけるシイラの漁業と利用」、『国際常民文化研究叢書』（査読有）、1 巻、2013 年、47 - 55 頁。

２．橋村修、「地中海マルタにおけるシイラ漁業と沖合集魚装置漁業」、『国際常民文化研究叢書』（査読有）、1 巻、2013 年、153 -160 頁。

３．橋村修、「沖合集魚装置漁業をめぐる漁場利用の史的展開」、『国際常民文化研究叢書』（査読有）、1 巻、2013 年、127 -151 頁。

４．橋村修、「日本列島周辺海域における回游魚シイラの漁業と利用－明治 20 年代～平成 10 年代－」、『国際常民文化研究叢書』（査読有）、2 巻、2013 年、159 -178 頁。

５．橋村修、「東日本大震災後の沿岸部漁村の様子と昭和 8 年津波記録」、水津嘉克編『「東北地方太平洋沖地震」で被害を受けた漁村部と地域住民の現状と支援課題に関する実践的研究』（平成 24 年度東京学芸大学「重点研究費」研究成果報告書）（査読無）、2013 年、11-21 頁。

６．橋村修、「漁業関係の金石文（顕彰碑等）からみた移動と漁業―漁場開発、漁法伝播―」、菅美弥編『マイノリティとジェンダ

ーの視点からみる人口流動：教育資料開発にむけて』(平成 24 年度東京学芸大学「重点研究費」研究成果報告書)(査読無)、2013 年、65-73 頁。
7．橋村修、「食の安全・信頼を造る　地域の魚をめぐる漁撈・加工・魚食―資源循環の民俗―」、『生活学論叢』(査読有)、21、2012 年、23 -25 頁。
8．橋村修、「あま漁村の俵物諸色海産物の採取と集荷の権利―近世後期の肥後国天草郡二江を事例に―」、『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ』(査読無)、63、2012 年、169～184 頁。
9．橋村修、「地中海マルタにおける集魚装置漁業と魚食文化」、岩田重則編『グローバリズムの中の民俗学』(平成 23 年度東京学芸大学「重点研究費」研究成果報告書)(査読無)、2012 年，25～38 頁。
10. 橋村修、「モライウオ・ヌスミウオ再考―漁師の移動とカンダラー」、出口雅敏編『比較地域研究の手法による移動民研究』(平成 23 年度東京学芸大学「重点研究費」研究成果報告書)、2012 年，15～26 頁。
11. 橋村修、「飯岡の民俗と震災津浪」、水津嘉克編『「東北地方太平洋沖地震で被害を受けた漁村」の現状と支援課題に関する調査』(平成 23 年度東京学芸大学「重点研究費」研究成果報告書)、2012 年、4～28 頁。
12. 橋村修、「日本列島における「旬」をめぐる環境民俗―地魚・回游魚・地元民―」、『文化人類学研究』(査読有)、12、2011 年、34～51 頁。
13. 橋村修、「漁業」、『新上五島町北魚目の文化的景観保存計画』(査読無)、1、2011 年、65～79 頁。
14. 橋村修、「上五島の漁場利用」、『新上五島町北魚目の文化的景観保存計画』(査読無)、1、2011 年、225～248 頁。
15. 橋村修、「近世期における天草下島の東シナ海側の漁業と漁場利用」、『文化的伝統の息づく大江の農村景観』(査読無)、1、2011 年、106～117 頁。
16. 橋村修、「地域の魚の見直しを！－シイラと人との関わりに見る古今東西－」、『SHIP&OCEAN Newsletter』(査読無)、223、2010 年、2－3 頁。
17. 橋村修、「「魚の民俗史的履歴」の試み―日本国内、世界各地で評価の分かれる回游魚シイラー」、『BIOSTORY』(査読無)、14、2010 年、96-101 頁。
18. 橋村修、「薩藩沿海漁場図」にみる知覧と頴娃」、『ミュージアム知覧紀要・館報』(査読無)、12、2010 年、34～39 頁。

〔学会発表〕(計 6 件)
1．橋村修、「食の安全・信頼を造る　地域の魚をめぐる漁撈・加工・魚食 - 資源循環の民俗 - 」、日本生活学会第 39 回大会、2012 年 6 月 2 日、大阪大学中之島センター（大阪府)。
2．橋村修、「マルタにおける集魚装置漁業―Maltese FADs Fishery」国際常民文化研究機構「漁場利用の比較研究」平成 23 年度第 2 回共同研究会、2012 年 2 月 18 日、関西学院大学（兵庫県)。
3．橋村修、「有明海をめぐる漁場紛争に関わる史料と絵図―明治 20 年代の長崎県と熊本県」、国際常民文化研究機構「漁場利用の比較研究」平成 23 年度第 2 回共同研究会、2012 年 2 月 18 日、関西学院大学（兵庫県)。
4．橋村修、「海の民俗をめぐる諸問題－回遊魚、旬、災害－」、近畿大学民俗学研究所講演会(招待講演)、2011 年 10 月 21 日、近畿大学（大阪府)。
5．橋村修、「日本の「旬」をめぐる環境民俗論―地魚、回游魚、地元民」、早稲田文化人類学会公開シンポジウム、2011 年 1 月 22 日、早稲田大学（東京都）
6．橋村修、「回游魚シイラをめぐる漁業、利用、文化：「魚の民俗史的履歴」」、地域漁業学会愛媛大会、2010 年 11 月 6 日、愛媛大学教育学部（愛媛県）

〔図書〕(計 3 件)
1．橋村修、冬弓舎、「回遊魚利用をめぐる文化地理」林喜代美編『漁業、魚、海をとおして見つめる地域』2013 年、304 頁(166－179 頁)。
2．橋村修、勉誠出版、「魚の民俗と神話―海と川の回遊魚スズキと暖流域の回遊魚シイラ」『古事記　環太平洋の日本神話（アジア遊学 158)』、2012 年、208 頁（183 頁～195 頁)。
3．橋村修、熊本県荒尾市、「農水産業の変化」『荒尾市史　通史編』、2012 年、1598 頁（1464～1481 頁)。

〔その他〕ホームページ等
http://univinfo.u-gakugei.ac.jp/u-gakugei/hp/hasimura1.html

6．研究組織
(1) 研究代表者
橋村　修（HASHIMURA OSAMU)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：00414037